

處の家にても室内には炬燵設けられて雪圍ひに
てうす暗けれども落ちつきし住家の如き心地せ
られていとのごやかなり。外には雪降りつづき
て繽紛と窓うつ聲の梢鳴らす北風と交りて聞ゆ
る夜にも内には炬燵圍みし一群の乾柿食うべつ
、夜の更くるをうち忘れて語りつづくる様いと
樂しげなり。

思へば北海の寒地に熊を友とするアイヌも樟
腦茂れる臺灣の山奥に裸跣にて軀けめぐる生蕃
も彼等にとりては都大路の高樓よりははるかに
慕はしき處はそが故郷なるべし。郷人に容れら
れずして郷國に最後の告別をなしたるバイロン
も尙且つ「異國の灰となるとも魂は尙故郷を愛
するなり」と叫びしなり。更に顧ればかの淡暗き
會津の天地は我が最愛の地たるなり、その一樹
一河を夢むと雖も、我にとりては千糸万縷の情
濃かに傍人のはかり知り得ざる愛郷の念は勃々
として湧き出づるなり。
これその自然の美はしきがためなるか、我をば
不、み育てし父母あるが故か、はた我と陸みし

同胞あるが故か。自然の美はしきは何ぞ會津の
みに限らんや、父母去り、同胞に離れし今日尙
愛郷の念禁じ能はざるは何故ぞや。

●硯 (即題)

文科二年 蚊 泉 靖 子

海もあり陸もありて自ら一つの小さき世界を
作りつ其の海は深からねども底には尊き玉もひ
そむべく其の陸は廣からねども千々の言の葉の
出づべきものは硯にあらすやそれ櫻花咲き満ち
たるあした筆さしひたしなば馥郁たる花の香も
匂ふべく皎々たる月の夕墨すり流さばさやけき
かけもやどるべしされば月花のあした夕は更に
て樂しきにつけ悲しきにつけ心一つにあまる思
ひを紙にうつすは此の石のいさをにこそ。

あはれ清き机の上におきて日ねもす硯の小世
界に鑒み海をあさりて玉をひろひ陸を耕して千
々の言の葉を拾ふはいと興ある事にあらずや。

短歌

伊香保にて

柴舟

年暮れぬ雪はだらなる赤城山靜かに見れば涙こぼるゝ
さびしきは冬の山かないはほさへ木さへ群がり立ち立てども
こぼれたる雪の色のみうき出で、夕かげ早き冬の山かな
一人してあらるべしやは雪ぐもり風なき山の空にむかひて
雪近み落ちぬべき葉もおちて來ぬ山の林の年のくれかた
中空に消えたる雪が襟卷のさきに露する朝の湯の谷
あはれなる雪の隠れ家湯の谷の烟の中に羽ならす鳥
夕日さす雪の林のあかるさにおぼえず歌ふ口馴れし歌
風をいたみ日かげもさゝぬ崖下の住ひかなしや冬の山里
湯の烟烟れる雪とみだれあふ冬の谷間を今日も見ることかな